

## あの頃を懐かしむ

川本正之

水船さんが亡くなられたと平野明夫さんから連絡をいただいた。85歳であった。水船さんは、新婚の私が広島支店の三次作業所に乗り込んで半年してから名古屋支店に転勤してきた時、初代土木課長で、その後初代土木部長になられた。

私は、昭和42年28歳のとき建設省天竜川災害復旧護岸工事の終盤に近い現場の責任者として赴任した。しかし建設省から年が若いと言われたか、未経験だということか、水船さんが社外的に所長兼務となり、実質の工事は私がまとめた。

伊豆大仁ゴルフ場工事では、現場から狩野川に濁水が流れ、お施主さん（伊藤忠商事）は狩野川漁協から3億円の賠償を要求された。本社の土木部長であった水船さんが現場に来られて、「川本君のツキも終わりだなァ」と突き放された。水船さんも気合を入れるために言われたのだと思った。それに発奮し努力して補償を小額で解決し、好成績で工事を終えた。竣工式では伊藤忠商事の瀬島龍三副社長から石上社長に「川本君を褒めてやれ・・・」とおっしゃっていただいたのか、お蔭様で社長賞を頂戴した。

コクドOB会報第106号が届けられた。今回の中身はよくまとめられ、中電畑薙ダムの古い写真もよく添付されたと感心した。畑薙ダムに関しては、名古屋支店の先輩方や奥矢作の現場で一緒になった中電の担当者からたびたび当時の話を聞かされた。

水船さんからは、「毎朝中電から出面を取らされた」、と言っておられたのを思い出した。

一昨年私たちの工業高校のOB会では、毎年「歩こう会」を実施しているが、大井川鉄道に乗りたいという希望で私が計画し、中部電力にお願いして、井川ダムのホロー・グラビティダム堤体（畑薙ダムも同じ）内を案内していただいた。

工業高校土木を卒業した私は、電源開発に入社して新入社員9名と一緒に奈良県吉野郡十津川村に配属された。奈良県五條市の国鉄・五条駅からランドクルーザ3台に分乗、砂煙をあげ未舗装の道を3時間強かけて風屋ダム建設事務所に着いた。山また山の中で驚き、逃げて帰れないなと思った。この現場では、日本国土開発は小松原さん（元副社長）が所長で仕事されていたようである。私は下流に新設する二津野ダムの調査測量に回された。

二津野ダムには「プロペラ船」が登場するのである。奈良・和歌山県境に近い十津川村平谷までは道路があったが、平谷から下流には、人道はあったが車は通れないので、資材運搬などに新宮から電源開発が持っている2隻のプロペラ船が十津川を遡上していた。測量に行くにもプロペラ船に乗って毎日往復した。昭和34年9月の伊勢湾台風の増水で1隻は流されてしまった。

野村さんたちが、プロペラ船の調査に熊野川に来て、操船にベテラン船員数名の派遣を受けたと知り、当時の情景を思い出し、びっくりした。畑薙での野村さんのプロペラ船の話は、この会報で初めて知った。

会報の写真説明にある5箇所の橋梁について、中電の畑薙工事担当者から聞かされた話では、当時の国土の担当者は、橋梁の鉄筋加工・組立てを教えてやらないとできなかったと言われた。構造物の経験が少なかったのであろう。しかし、この研鑽と実績があったからこそ関西電力黒部第四工事で熊谷組の大町トンネル坑口までの新設道路を特命で戴けたのではないだろうか。

私は定年後、興味が沸くと調べて書き物に熱中している。

黒部第三工事は、電力不足から陸軍の命令で昭和 11 年秋から開始し難工事の末 15 年秋に完工した。吉村昭の著作「高熱隧道」では、高熱岩盤の掘削と泡雪崩の様が記述されている。

黒部第四工事を題材にした「黒部の太陽・信濃毎日新聞社の元記者・大本正次著」の中に大手に伍して当社の社名が 3カ所出てくる。その一部を紹介する。

「・・・特命の五社が決定した。間組、鹿島建設、熊谷組、佐藤工業、大成建設の各社だった。五社の代表は宇治電ビル四階の関電社長室に招かれた。社長室には関電側は森・中村の両副社長、平井建設事務所長その他十人ほどの重役や幹部が顔を揃えていた。各社の代表は別室で待っていて、一社ずつ社長室に招かれる。五社のほかに、大町側での市街地やトンネル坑口へのアプローチの道路などを請負う日本国土開発などの建設会社・・・」とある。

「大町トンネルが破砕帯に突入して難航している時期、黒四は、放棄されるだろう、関電は、崩壊の危機に瀕するだろうと世間から叩かれている時、太田垣社長はトンネルの中を隈なく見て現場を激励した夜、クラブハウスで夕食会を催した。関電側からは平井や芳賀など現地の幹部、招かれた客は間組、鹿島建設、熊谷組など、一、二、三工区担当の建設会社と、大町ルートの道路を施工した日本国土開発など各社の幹部たち・・・」とある。優越感を感じながら読んだ。会報を読んであまりにも懐かしく、思わず一筆したためた。